

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第七章～第八章\*

堀 智 弘

第七章 大屋敷での生活

快適と贅沢／手の込んだ浪費／屋敷の召使いたち／男の召使いと女の召使い／その容貌／奴隷貴族／馬小屋と馬車庫／際限ないおもてなし／贅沢な料理の香り／奴隷制の偽りの性質／奴隷たちの幸福／そな見かけ／奴隷も奴隷所有者も同じく惨め／奴隷所有者たちのいらいらとした不満／些細なことにケチをつける／老バニー／その仕事／鞭打ち／屈辱的な光景／特殊な事例／ウイリアム・ウィルクス／ロイド大佐のおそらく息子／奇妙な出来事／奴隷は貧しい主人より豊かな主人を好む

食事といえは哀れな奴隷に粗末なトウモロコシ粉と傷んだ肉し

か与えないしみつたれた吝嗇さ、服といえはごわごわした麻くず地しか与えず、どんな天候だろうと、風雨で彼のボロボロの服が吹きざらしになると、哀れな奴隷を畑仕事に駆り出す吝嗇さ、若い母奴隷が柵の隅で彼女のお腹をすかせた赤子に乳を与える時間さえもつたに与えようとしない吝嗇さは、ロイド家の本拠地である大屋敷の神聖な敷地に近づくことと完全に姿を消す。ここでは聖書の一句がまさしく例証される。高い特権を与えられたこの邸宅の住人たちは、文字どおり「紫の衣や柔らかい麻布で」着飾り、贅を凝らした生活の毎日を送っていたのだ！<sup>1</sup>その食卓は、苦心して農園の内外から集められ、血で賄われた数々の贅沢品の重みで重くまばかりである。いくつもの田畑と森林と河川と海はここに進貢させられている。莫大な富とその気前よい浪費によつ

(1)

\* 本稿はJSPS科研費JP18K00404による研究成果の一部である。

1 ルカによる福音書 16:19.

て、大屋敷は、目を楽しませうる、あるいは味覚をそそりうるすべてのもので満たされている。ここでぜひとも必要とされているのは、食事ではなく食欲である。魚、肉、鶏肉はここには豊富にある。あらゆる品種のニワトリ、野生種でも家畜種でもあらゆる種類のカモ、普通のバリケンに巨大なバリケン、ホロホロチョウ、シチメンチョウ、ガチョウ、クジヤクはいくつもの鶏小屋にいれられ、来るべき消費の渦巻きに備えて太って脂肪を蓄えている。優雅なハクチョウ、雑種のガチョウ類、黒い首のガン、ヤマウズラ、ウズラ、キジ、ハト、そしてあらゆる見慣れない種類の選り抜きの水鳥が、この一家の巨大な網に捕らえられている。厳選された種類と質の牛肉、子牛肉、羊肉、鹿肉が、この大消費者のもとへ山ほど運ばれてくる。チェサピーク湾がもたらすあふれるほどの恵み、そのメバル、スズキ、ニベ、淡水ニベ、マス、牡蠣、カニ、亀は、大屋敷の燦然たる食卓を飾るべく、ここに持ち込まれる。酪農品、これもおそらくはメリーランドの東岸で最高級のものである——イギリスからこの目的のために輸入された最高品種の牛によって供給される——こちらもまた、豪華で終わることのない一連のごちそうの魅力を高めるため、かぐわしいチーズ、黄金に輝くバター、美味なクリームといった寄進物を豊かに注ぎ込む。大地の実りも忘れ去られたり、おろそかにされることはない。大ききの広々とした肥沃な庭は、通常の農場とは別に独立して整備されていて——そこには、スコットランドから招かれた科学的手法の庭師（マクダーモット氏なる人）と彼が指揮する四人の部下がいる——このあふれんばかりの食卓への貢献の豊かさ<sup>2</sup>と美味しさの点では引けを取っていなかった。柔らかいアス

パラガス、水々しいセロリ、美味しいカリフラワー、そしてナス、ビート、レタス、パースニップ、エンドウ豆、サヤインゲンの早生種と晩生種、ハツカダイコン、赤肉マスクメロン、あらゆる種類のメロン、北部の耐寒性のリングゴから南部のレモンやオレンジに至るまでのあらゆる気候と種類の果物と花が、この地において全盛を誇っていた。ボルチモアは、スペインからイチジク、干しブドウ、アーモンド、水々しいブドウを集めていた。フランスからのワインとブランデー、中国からのさまざまな風味のお茶、ジャワからの豊潤で芳しいコーヒーがすべて協働することで、自尊心と怠惰が豪奢と安心のもとに闊歩し、くつろぎ過ぎる高等な生活を盛り上げていた。

念入りに作られた背板の高い椅子のうしろに立っているのは、男女の召使いたち——数にして十五名——その勤勉さと忠実さを考慮しただけでなく、その容貌、その優美な敏活さと魅力的な身のこなしを特に重視して、細やかに選抜された召使いたちである。その何人かは扇を手にして、石膏のごとく白さの淑女たちの火照った額に向けて、生気を取り戻してくれるそよ風を送り込んでいる。別の者たちは、必要なものがないかどうか、言葉や身振りで示されるほどはつきりとしてくる前に見て取ろうと、熱心な眼差しを凝らしており、必要になりそうだとわかれば、小鹿のような足取りでそれを提供する。

こうした召使いたちは、ロイド大佐の農園において、ある種の

2 一八二四年にアーロン・アンソニーは、ウィリアム・マクダーモットをエドワード・ロイド五世のために雇い入れている。マクダーモットは少なくとも一八二五年の春までアンソニーの家に寄宿していた。

黒人貴族を形成していた。彼らは、野良働きの者たちとは、肌の色を除くいかなる点においても似ておらず、肌の色では、ベルベットのような豊かで美しい光沢があるために優越していた。その毛髪もまた、同様の優勢を誇っていた。黒人の優美な女中は、彼女の若い女主人がほとんど着用しなかった絹をまとって動きまわり、男の召使いは、彼らの若主人のありあまる持ち衣装を譲り受けることで、同様によい身なりをしていた。なので、すがたかたち、立ちふるまいや話し方、趣味と習慣だけでなく、衣服においても、これら少数の優遇された者たちと奴隷宿舎や田畑にいる悲しみと飢えに打ちひしがれた大多数のあいだの距離は計り知れず、この距離が乗り越えられることはめつたになかった。

つぎに馬小屋と馬車庫に目を向ければ、自尊心と豪華な贅沢の同様の証拠を見出すことになる。ここにあるのは、内部は柔らかく、外部はさらびやかな三台の壮麗な大型四輪馬車である。ここにはまたギグ馬車、フェートン馬車、バルーシユ馬車、サルキー馬車、そしてそりがある<sup>3</sup>。ここには鞍と引き具——美しく製作され、銀で裝飾された——があらゆる注意を払って保管されている。馬小屋では、速さと美しさにかけては最も認められた血統の馬がまるまる三十五頭、ただ娯楽のためだけに飼われているのを見るであろう。ここには、これらの馬の世話をするために常時雇われている者が二人いる。大屋敷からのどんな要請にも応えられ

3 ギグ馬車は一頭引きで二輪の軽馬車、フェートン馬車は通常二つの座席がどちらも前方を向いた無蓋の四輪馬車、バルーシユ馬車は二つの座席が向き合った無蓋の四輪馬車、サルキー馬車は競馬にも使用されるような非常に軽量の二頭引きの二輪馬車である。

るように、そのうち一人は常に馬小屋にいなくてはならない。馬小屋の先には、獵犬——二十五匹か三十匹からなる一団——のためだけに建てられた建物があり、その餌は十二名の奴隷の心を躍らせるほどのものである。奴隷の労苦を消費するのは馬と獵犬だけではない。ロイド家では、健康を求める北部の聖職者や商人がそこにあずかる機会があれば、だれでも驚き魅了されてしまうようなおもてなしが実践されていた。大佐は、田畑からではなく、彼自身の食卓から判断すれば、太っ腹なおもてなしの手本であった。彼の家は、夏のあいだの数週間にわたって文字どおりのホテルであった。特にそうした時には、焼き、煮、あぶること出た香ばしい煙があたりを満たすのであった。こうした香りは風に運ばれて、わたしもその分け前にあずかったが、肉はより厳格な独占のもとにあった——たまにダニエルさまからひと塊をもらえる場合を除いては。ダニエルさまはわたしにとっていわば宮廷にいる友人であり、わたしの食欲な好奇心が知りたがっていた多くの事柄を、わたしは彼から学んだ。わたしはロイド大佐の所有ではなく、この裕福な大佐の召使いの所有であるため部外者だったのだが、来客があればつねにそれを察知し、それが誰なのかもわかった。そうした機会には、自尊心と趣味と金銭が見る者の目をくらませて魅了するためにできることは、すべてなされた。

ロイド大佐の豪勢極まる娯楽のひとつを目撃したあとに、その召使いたちにはたいした衣服も世話も与えられていないと、だれが言うことができただろうか？すべての身のこなしが敏活で余裕があつて優美で、気高い優越の意識を示しているような人々に対して、気狂い以外のだれが同情の念を催すことができたであろう

か？そして、ロイド大佐も普通の人間と同じ困難を経験するなどと、だれがあえて考えただろうか？この点では主人も奴隷も同様の栄光に浴するようにはみえるだ！これらすべてが見掛け倒しなどということがありうるだろうか？ああ！結局これはまやかしにすぎないのかもしれない！この途方もない富、このぎらぎらとした壮麗さ、この浪費される贅沢、この労苦からの免除、この安逸な生活、この海ほどの富裕さ、しかり、これらすべてはなんだというのか？幸福と甘美な満足の天国の門は、こうした請願者に開かれているだろうか？そんなことはない！薄い毛布以外にくるまるものはなにもなく、硬い松の板の上で寝る哀れな奴隷のほうに、羽毛のベッドと綿毛の枕に横たわる火照り頭の贅沢屋よりもぐっすり眠るのだ。日々を無為に過ごす怠け者にとって、食事は毒であって、生命を維持するために必要なものではない。彼らの食事皿の下に隠れているのは、自己欺瞞に陥った大食家に、鈍痛、苦痛、激しいかんしゃく、制御不能な激情、不機嫌、リューマチ、腰痛、痛風を与えようと手ぐすね引いている見えない悪霊であり、ロイド家の人々はこうした症状にことかかなかつた。甘やかされた安楽家には、休まる場所などないのである。今日心地よいものも、明日にはうんざりするようになり、いま柔らかいものも、別のときには固くなり、朝に甘いものも夕には苦くなるのだ。邪悪な者にも、怠惰な者にも、堅固な平穩はなく、「落ち着き、いな、いな、海のようにかき乱される」<sup>4</sup>。

4 引用部分を含めたこの一節全体が、おそらくイザヤ書57:20-21にもとづく。

わたしには、ロイド家の人々の落ち着きのない不満足と気まぐれな不機嫌を目撃するよい機会が何度もあった。わたしは馬が好きであったため——とはいっても他の少年たちと同程度であったが——かなりの時間、馬小屋に立ち寄っていた。この設備は、特に「老」と「若」バーニー——父と子——が世話をしていた。

老バーニーは茶色がかつた肌をした見栄えのよい老人で、かなり恰幅がよく、奴隷にしては威厳のある風采であった。彼は明らかに、自分の仕事に入れ込んでおり、その役割を名誉だと考えていた。彼は蹄鉄工と馬丁を兼ねていて、馬の瀉血と口蓋腫の切除ができ、馬の薬についてよく知っていた。病気になった馬をどう治療したらよいのかについて、老バーニーほどわかつている人は農場にいなかった。だが、彼の才能と技能はほとんど彼を利するとはなかった。その仕事はまったく羨ましがられるようなものではなかった。よく贈り物はもらっていたが、同様に鞭打ちももらっていた。というのも、娯楽用の馬の管理のことになると、ロイド大佐はどんなことよりも不合理で過酷になったからである。

この動物に対して少しでも世話が行き届いていないと思われるのと、間違いなく屈辱的な罰が課されるのであった。大佐の馬や犬は彼の召使いたちよりもよい扱いを受けていた。馬や犬のベッドは家畜同然の人間たちのそれよりも柔らかく、清潔でなければならなかった。馬に対してなんらかの間違いがなされたら大佐に疑われてしまうと、どんな言い訳をしても老バーニーは逃げおせすることはできず、そのため、過ちを犯していない時でも、しばしば罰せられた。馬小屋で、ロイド大佐、およびその息子たちや義理の息子たちが浴びせかける数多くの不合理でいらだった叱責を

聞くことは、ひどく苦痛であった。大佐には義理の息子が三人いた——ニコルソン氏、ワインダー氏、ラウンズ氏である。彼らはみな、一年のうちの一定期間を大屋敷で過ごし、気が向いたときに召使いたちを鞭打つという贅沢を楽しんでいたが、彼らがその気になるのはたまにというわけではまったくなかった。馬小屋から馬を一頭も外に出してもいないうちから、文句が飛んでくることもあった。「毛にほこりがついてるぞ」、「手綱がねじれてるぞ」、「たてがみがまっすぐ立っていないぞ」、「きちんと穀物をあげてないだろ」、「頭の様子が変だぞ」、「前髪が櫛で整えられていないぞ」、「けづめ毛がきちんと切り揃ってないぞ」と言って、なにかがつねに間違っているのであった。しかし、そうした苦情にどんなに根拠がなからうと、バーニーは帽子を手に、唇をきつと結んで苦情に耳を傾け、一言も反論することなく立っていなくてはならなかった。彼はいつさい返事をすることも、説明をすることも許されていなかった。主人の権力は絶対で責任を負うことがないので、その判断に間違いがあるなどと思つてはならなかった。自由州であれば、主人がこのように理由もなしに苦情を述べれば、こう言われるかもしれない——「お気に召すことができません、申し訳ありません、ですが、できる限りのことはしましたので、どうかしたいのであれば、わたしを解雇してください」。しかしここでは、馬丁は立って話を聞き、震えていなければならなかった。わたしが目撃した最も暗鬱で屈辱的な光景のひとつに、ロイド大佐自身による老バーニーへの鞭打ちがある。そこにいたのは、両者とも年配の二人の男、銀色の巻毛のロイド大佐と、禿げて苦勞にやつれた額の老バーニーである。主人と奴隸、この世

では主従関係にあるが、神の裁きの前では同等であり、物事の通常の流れに則れば、二人はもうすぐ別の世で再会することになっているのだ。そこは、神への服従と不服従に基づく区別を除いては、すべての区別が永遠にとりはられる世界である。「帽子をとれ！」と尊大な主人が言うのと、老バーニーは従った。「悪党め、上着を脱げ！」と言われると、バーニーの上着は脱げた。「ひざまずけ！」と言われると、老人はひざまずいた。その肩はむきだしで、その禿げた頭は太陽にてかてかと光り、その年老いた膝は冷たく湿った地面についた。このように慎ましく屈辱的な姿勢にあるときに、主人は——彼がその人生の最盛期と最良の力を捧げたあの主人は——前に進み、馬用の鞭で三十回鞭打つのだった。老人は、一撃ごとにわずかに肩をすくめ、うめき声を漏らしながらも、最後まで忍耐強くそれに耐えた。その鞭は軽い乗馬用の鞭だったので、ロイド大佐が老バーニーの肉をひどく傷つけることに成功したとは思えないが、年老いた男——夫であり父親である人物——が、塵芥の虫けらでしかない人間の前に慎ましくひざまずいているという光景は、当時わたしを驚かし、衝撃を与えた<sup>5</sup>。そして奴隸制の邪悪さについて考えられる年齢になって以来、自分で目撃したこの事実ほどに、わたしにとって価値の

5 神の前では人間はみな虫けらにすぎないという一節に類似した表現は、ヨブ記25のや詩篇124にみられるが、「塵芥の虫けら (a worm of the dust)」という言い回し自体は聖書では使われていない。ただし、ジョン・サン・エドワーズが「キリストの卓越性」(“The Excellency of Christ,” [238])などの演説でこの言い回しを使っており、カルヴィニズムではある程度おなじみの表現であったと考えられる。またダグラスは本書の第十七章で、エドワード・コヴィイを「塵芥の虫けら兄弟」と形容している。

ある事実はほとんどない。これによって奴隷制は、その真の色合いのままに、その唾棄すべき忌々しさが全開された状態であらわにされる。ただし、真実を尊重すれば、老バーニーやほかの奴隷が鞭打ちを受けるためにひざまずくの強要されるのを見るのは、これが最初で最後であつたと言わなくてはならない。

馬小屋で見たもう一つの出来事が、別の関連ですでに言及した奴隷制の側面を例証するので、それについて述べよう。ロイド大佐は二人の御者に加えて、ウイリアムという名前の御者を雇っていたが、奇妙なことにこの人物は、本拠農園の白人黒人たちからウイルクスという名字でしばしば呼ばれていた。ウイルクスは非常に格好のよい男であつた。彼は農園のだれと比べても肌の色が白く、すがたかたちの雄々しさと顔立ちのよさにおいて、マレー・ロイド氏にひときわそっくりであつた。ウイリアム・ウイルクスは、まだ農園において、非常に優遇されているある女性奴隷が産んだ、ロイド大佐の息子だとささやかかれていて、これが事実であることもかなり広く認められていた。この噂を信じる多くの理由があつたが、それはウイリアムの容貌だけにとどまらず、彼がほかの者たちに対して好き放題をしてもだれも異議を唱えることができず、主人に対して自分は単なる奴隷以上のなにかであると同様に意識していることに由来していた。さらに、ウイリアムにとって彼とよく似たマレー・ロイドは天敵となつていて、後者がウイリアムを売り払ってほしいと懇願して父親をひどく困らせていることもよく知られていた。実際、マレーは父親に休む間も与えず、ついに大佐はウイリアムを、当時の大奴隷商人であつたオースティン・ウォルドフォークに売り払つた<sup>6</sup>。ただし、ロ

イド氏は売却する前に、ウイリアムに鞭打ちをすることで事態をやりすごそうと試みたのだが、これは失敗した。それは妥協策に過ぎず、自家撞着に陥つた。というのも、鞭打ちを加えてまもなく、大佐は気が滅入ってしまった。ウイリアムに金の時計と鎖を与えることで虐待を償つたからである。もうひとつ、多少なりとも奇妙な事実としては、ウイリアムは非情なウオルドフォークに売られ、鎖につながれてボルチモアに送られて牢獄に入れられ、その後は南部へ運ばれる手筈だつたのに、なんらかの手段によって——わたしにとってはどこまでも謎である——ほかのすべての買手よりも高い値をつけて自分自身を買い、いまではボルチモアで自由市民として暮らしているのだ。鞭打ちを償うために金時計が贈られたのと同じく、自分自身の肉親を売るといふ恥ずべき行為を償うために、金銭が同じ手によって与えられたことを疑う余地はないだろうか。大屋敷農場でのウイリアムをめぐるあらゆる状況は、彼がほかの奴隷たちとは異なつた地位を占めていたことを示しており、奴隷所有者たちが人種混交に対して嫌悪を抱いていたとしても、それが、ウイリアム・ウイルクスがエドワード・ロイドの息子であつたという想定を禁じる理由にはまつたくならないのは確かである。事実上、人種混交は、わたしが奴隷制のもとにあつたあらゆる近隣では普通のことなのである。

ロイド大佐はその奴隷たちが彼に対して本当にどのようなことを考へ、感じていたのかについてあまり知る立場にいなかった。彼と

6 オースティン・ウオルドフォーク（一七九六—一八四七年）（ウォルドフォークではない）は、一八一九年以来、ボルチモアを拠点として活動していた奴隷商人。

奴隷との距離はあまりに大きかったので、そのようなことを知るのには不可能であった。彼が所有する奴隷の数はあまりに多いため、見ても自分の奴隷を見分けることができなかった。事実、奴隷の方でも、全員が彼のことを見分けられるわけではなかった。この点において、彼は不便なほど裕福であった。伝え聞かれるところでは、ある日、彼が馬に乗って道を行っているとひとりの黒人に会ったので、南部の公の街道で黒人たちに話しかける際のことのやり方でその黒人に話しかけたそうだとおつと、おまえさん、だれのもんだ?」「ロイド大佐です」と奴隷は答えた。「ほお、大佐はおまえさんをよく扱ってくれてるか?」「いいえ」という答えがすぐに返ってきた。「なんだって!大佐はおまえさんをきつく働かせているのかい?」「はいそうです。」「なら、大佐は食べ物を感じうぶんくれないのかい?」「いいえ、じゅうぶんもらっています、お粗末なものです。大佐は、この奴隷がどこで働いているのか確かめた後、道を進んで行き、奴隷の方も自分が主人と会話していたなどと夢にも思わずに、自分の仕事を続けた。奴隷はこのあと二、三週間、これについてなにも考えることも言うことも聞くこともなかった。その後、彼は、主人にケチをつけたという理由で、ジョージアの奴隷商人に売られることになったと監督から知らされた。彼はすぐさま鎖と手錠をつけられてしまい、こうしてなんの事前の警告もなしに、死よりも無慈悲な手によって連れ去られ、永遠に家族や友人から引き離されたのである。これが、一連のなにげない質問に対して、ありのままの真実を述べたことへの罰である。ひとつにはこのようなことがあるために、奴隷は自身の生活状況や主人について聞かれると、

ほぼ必ず、自分は満足していて、主人は親切だと言う。奴隷たちがみずからの生活状況についてどのようなことを思っていて、感じているのかを可能であれば確かめるために、奴隷所有者たちが奴隷たちのあいだに密偵を送り込んでいることは知られてきた。こうしたことがよくあるために、口は災いの元という格言が奴隷たちのあいだで確立することになった。奴隷たちは、真実を述べることの帰結を甘受するよりも、真実を押し殺し、そうすることでみずからが人類の一員であることを証明するのである。もし彼らがみずからの主人についてなにか言うとなれば、特に見知らぬ人に話す際には、それはたいがい主人に好意的なことである。わたしが奴隷であったころ、主人が親切かどうかしばしば聞かれたが、否定の返事をしたことは記憶にない。また、このようにすることで、自分が真つ赤な嘘を述べていると思うこともなかった。というのも、わたしは自分の主人の親切さを測る際に、周辺の奴隷所有者たちが示す親切さを基準としていたからである。しかしながら、奴隷もほかの人間と同じで、同じような偏見をもっている。彼らは、自身の生活状況がほかの人の生活状況より勝っていると思いがちである。多くの者はこの偏見に影響されて、自分自身の主人がほかの奴隷たちの主人よりもましだと考えており、しかも場合によっては、まさに事態は逆であるのに、そう考えるのである。実際、奴隷たちが、おのおの自分自身の主人がほかの者たちの主人よりも優れていると主張して、自分の主人の相対的な親切さについて争い口論するのさえ珍しいことではない。同時に、自分の主人を個別に見ては、主人についてお互いに悪口を言い合うのだ。わたしたちの農園ではこんな調子であった。ロイド

大佐の奴隷たちがジェイコブ・ジェブソンの奴隷たちと出会うと、お互いの主人について口論することなく別れることはめつたになかった<sup>7</sup>。ロイド大佐の奴隷たちは大佐のほうに裕福だと主張し、ジェブソン氏の奴隷たちはジェブソン氏のほうが頭がよいと主張した。ロイド大佐の奴隷たちは、大佐がジェイコブ・ジェブソンを売り買いできると自慢し、ジェブソン氏の奴隷たちは、氏がロイド大佐を鞭打つことができると自慢するのだった。こうした口論はほほいつも両者のけんかで終わり、相手を打ち負かした側が争点について言い分を通したと考えられた。彼らは自分の主人が偉大であれば、自分たち自身も偉大だと思っているようであった。奴隷であるだけでもうじゅうぶんに嘆かわしいことであつたが、貧乏人の奴隷であることは間違いなく面汚しだと考えられたのである。

## 第八章 恐怖の一章

オースティン・ゴアはその性格の素描とひとつの階級としての監督と監督たちの特徴とオースティン・ゴアの際立った個性とその義務感と彼の鞭打ちの仕方と哀れなデンビーの殺害といかにしてそれが起こつたか大騒ぎといかにしてゴアはロイド大佐と和解

7 ジェイコブ・ジェブソンは、第四章で言及されるギブソン家の家長ジェイコブ・ギブソン（一七五九—一八一八年）のことだと考えられる。ギブソン家の農園はロイド大佐の農園に隣接していた。ただし、ここで述べられているダグラスの幼少期には、ジェイコブはすでに死亡しており、ギブソン家の農園はその息子フイエットが相続していた。

したか罰せられない殺人もひとつのおぞましい殺人の話と南部諸州では奴隷を守る法が執行できない

ロイド大佐の農園でセヴィア氏の監督下にある奴隷たちの過酷な運命については、読者はすでに気づいて遺憾に思ってくれているだろうが、すでに別のところではめかしたように、彼らがホプキンズ氏の比較的穏やかな支配を享受することは許されていなかった。ホプキンズ氏の後を継いだのは非常に異なった人物であつた。この新たな監督の名前はオースティン・ゴアであつた。この人物に対して、特別な注意を払うことにしたい。というのも、彼の支配下では——古株の奴隷たちによれば——この農園でそれまで経験されてきた以上の暴力と流血の苦しみがあつたからである。どうすればこの人物を読者の前に適切に提示することができるのか、ほとんどわからないことを告白する。たしかに、彼は監督なので、相応にその階級特有の特徴をもっていたが、彼をたんに監督と呼ぶことは、この人物についての正しい見方を読者に伝えることにならないであろう。わたしは監督たちをひとつの階級として話す。事実かれらはひとつの階級なのだ。かれらは、パリの魚売り女やロンドンの石炭積み下ろし人が社会の他の成員と区別されるように、南部の支配者階級とは区別される。かれらは南部において、ニューヨークの公園通りのごろつき連中の集団と同程度に際立った、別個の同業者集団をなしている<sup>8</sup>。かれら

8 公園通りはおそらく、コロンバス公園周辺のバワリー地区近隣の通りを指す。当時のバワリー地区では、近隣の若者たちがギャング団を組織し、縄張りをめぐつてお互いに激しく争っていた。

は、人間の領分と適性を決定するあの偉大なる引力によって、組織され、分類されてきた。この引力によって、有害で残忍な性質が道徳的知的資質にまさっている者たちは、こうした支配的な本能や性質を最大限満たすことを約束してくれる仕事に自然と落ち着くように定められているのである。監督の仕事は、こうした生のままの粗野さと残忍さの素材を必要とし、そうした人々を南部社会のひとつの独立した階級としてしるしづけている。しかし、ほかのすべての階級と同じように、この階級においても、この一群におおむね近親性を示しながら、際立った個性を持つ者が存在する。ゴア氏は、そうした一般的な特徴づけでは正しくとらえきれない人物のひとりであった。彼は監督であるが、それ以上の存在であった。監督の有害で暴君的な性質にくわえて、正当な主人を思わせる性質をあわせもっていた。彼は彼の階級の狡猾さと卑しい野心をもっていたが、同業者たちがみせるむかつくほど威圧的な態度や騒々しい空威張りはみじんもみせなかった。彼には鷹揚とした独立の雰囲気があった。落ち着いた自己抑制、そして、子供時代から一生をつうじて使役人の前にひれ伏すことに慣れてきた哀れな奴隷よりも臆病でない人の心をひるませるほどの厳格な目つきを備えていた。ロイド大佐の本拠農園は監督業のための資質を發揮するのに十分な場を提供し、彼はそうした資質を際立って身につけていた。

ゴア氏は、ほんの少しのことばや眼差しを無礼へと仕立て上げることのできる部類の監督のひとりであり、憤るだけでなく、迅速かつ厳格に罰することのできる剛気さをもっていた。奴隷が口答えることはいっさい許さなかった。この点において、彼はエ

ドワード・ロイド大佐自身と同じくらい主人らしく絶対的であった。奴隷の面前で主人や監督が万が一でも間違つたようにみえるよりは、十数人の奴隷が過ちを犯していなくとも鞭の下で苦しむほうがましだという、奴隷所有者たちによって実際の見地から主張されてきた訓言にならつてつねに行動していた。こゝではすべてが絶対的でなく、罪があるうとなかるうと、告発されることは、鞭打ちを確実に受けるに十分である。このゴアなる人物がそこにいるだけで苦痛であり、わたしはガラガラヘビを避けるのと同様に彼を避けていた。彼の射抜くような黒い目、鋭く甲高い声は、奴隷たちに恐怖の感覚をつねに呼び起こしていた。若者にしては（二十五年か三十年前の彼のことを言っている）、ゴア氏は奴隷たちの前ではひとときわ落ち着きはらつて謹厳であった。冗談に興じること、滑稽なことを言うことも、気持ちを明かすこともなかった。ほかの監督であれば、いかに残忍であろうとも、時としてちよつとしたからかいに興じて奴隷たちの歓心を買おうという気も起こすものだが、知るかぎりではゴアはそのような弱みをけつしてみせることがなかった。彼はつねに、エドワード・ロイド大佐の農園の冷たくよそよそしく近寄りがたい監督であり、自分の仕事の義務を忠実に果たすことにもなう以上の喜びは必要としていなかった。彼が鞭打つ時には、義務感からそうしているようにみえ、結果がどうなるかと恐れていなかった。ホプキンスがいよいよやっていたことをゴアは機敏に行つた。このゴアには妥協を許さない意思、鉄のごとき実在性があり、それは、もし状況が許すならば、彼を海賊団の首長へと楽々とのしあがらせたであろう。海賊の首長の性格において必要

とされる冷静さ、残忍な野蛮さ、道徳的抑制からの自由といったものすべては、この男ゴアのなかに集約されていたとわたしは考える。彼がロイド氏の屋敷にいたあいだに犯したほかの数多くの衝動的な非道行為のひとつに、デンビーという名前の若い黒人の殺害があった。彼は時にビル・デンビーもしくはデムビーと呼ばれていた（わたしは音にもとづいて書き記しているが、ロイド農園での音声はあまり頼りにならない）。わたしは彼のことはよく知っていた。彼は動物のごとき活力に満ちた屈強な若者で、わたしを知るかぎり、ロイド大佐の奴隷のなかでも最も価値の高い者のひとりであった。なんらかの理由で——なんなのかはわからないが——彼はこのオースティン・ゴア氏の気分を損ねてしまい、後者は自分の習慣にしたがって彼を鞭打ちはじめた。彼がデンビーに数回鞭を当てたところで、後者が逃げ出して川に飛び込んだ。彼が首の深さまで水につかって、この監督の命令にどおりに水から出てくることを拒んでいると、この拒絶ゆえにゴアは彼を撃ち殺したのだ！ゴアはデンビーに、三回目呼びかけに従わなかったら撃つと言つて、三回呼びかけたと言われている。三回目呼びかけがなされたとき、デンビーはじつと動かなかつたので、まわりにいた奴隷たちの頭には疑問——「本当に撃つのだらうか？」——が思い浮かんだのだという。ゴア氏はそれ以上話し合うことなく、またデンビーを水から出てくる気にさせようという努力をすることなく、じつくりと銃を彼の顔に向け、突っ立つ

9 農園の記録によれば、当時二十歳ほどの Bill Demby は一八二二年に死亡している。

た犠牲者に致命的な狙いを定め、そして一瞬のうちに哀れなデンビーは死者の仲間入りをした。彼のずたずたの肉体は沈んでみえなくなり、その暖かく赤い血のみが彼が立っていた場所を示していた。

この悪魔の如き蛮行、この鬼畜の如き殺人は、重々予測されていたとおり、とんでもない大騒ぎを巻き起こした。恐怖の戦慄が農園のすべての者——この地獄ほどに暗い行為を犯した罪深い卑劣漢を除けば——のなかをかすめ去った。奴隷たちはほぼだれもがパニックとなり、驚き慄いて騒いでいたが、殺人犯自身は落ち着きはらって、なんら変わったことは起きていないかのような様子であった。この非道行為は我が主人を怒らせ、彼はそれをとがめたが、この出来事もつかの間の醜聞にさえならなかった。ロイド大佐も我が主人もこのことではゴアの無慈悲さを責めたが、それはなんにもならなかった。彼の返事、もしくは説明によれば——そのとき聞いたこととしてわたしが覚えているところでは——必要にせまられてこの尋常ならざる手段をとつたということ、デンビーは手に負えなくなつており、ほかの奴隷たちにとつて危険な手本となつてしまつていたこと、彼が訴えたようななんらかの迅速な方策をとらなければ、農園のすべての統制と秩序には終止符が打たれてしまうだろうということであった。あらゆる種類の残酷非道を覆い隠すあの非常に便利な口実——奴隷たちに「こゝを奪われる」というあの卑劣な脅し文句——が、同様の千もの犯罪の擁護のために引き合いに出されてきたのとちょうど同じように、この吐き気を催させる犯罪の情状酌量のために申し立てられた。もしひとりの奴隷が矯正されるのを拒み、そのような

ふるまいを続けるならば命を失うことになると言われているのに生きて逃げのを許してしまつたら、ほかの奴隷たちはすぐさまその手本を真似ることになるであろう。その結果は奴隷の解放であり、白人の奴隷化であろうと彼は主張した。ゴア氏の弁明、もしくは説明は申し分ないとみなされた——少なくともロイド大佐にとっては——と信じるあらゆる理由がわたしにはある。彼は農園での職務を継続していた。監督としての彼の名声は外部に広まり、彼のおぞましい犯罪は司法の調査を受けることさえなかった。殺人は奴隷たちの面前で行われたが、彼らはもちろん訴訟を起すこともできないし、殺人犯に不利な証言をすることもできなかった。法廷においては、一万人の黒人の証人の一致団結した証言よりも、彼のわずか一言のほうが遠くまで伝わるのである。

ゴア氏がやらなくてはならなかったのは、ロイド大佐と和解することだけであつた。それが終わつてしまえば、最も忌まわしき一件の殺人の罪深き犯人は、司法によって罰せられることも、彼が生きる共同体によつてとがめられることもなく逃げおおせるのである。わたしがメリーランド州を離れたとき、ゴア氏はトールポット郡のセント・マイケルズに住んでいた。もし彼がまだ存命していれば、おそらくまだそこに居住しているであろう。そして彼が今では、あたかもその魂が無実の者の血で汚されたことなどいっさいないかのように、高く尊ばれ、おおいに尊敬されていることは疑いようがない。わたしがここまで書いてきたことに対して、偽りで悪意に基づいているという烙印を押そうとする者がでてくるであろうことはよくわかつてゐる。わたしがここまで語つてきたようなことが実際に起きたのが否定されるだけでなく、メ

リーランド、でそのようなことが起きうるといふことも否定されるであろう。わたしに言えるのは——信じられないかもしれないが——だれがそれに異議を唱えようとも、わたしは文字通りの真実しか述べてこなかったということだけである。

わたしがこれを言うとき、熟慮の上で話している——メリーランド州のトールポット郡では奴隷、あるいはどんな黒人を殺しても、裁判所によつても共同体によつても犯罪とは扱われないといふことを。セント・マイケルズの船大工トマス・ランマン氏は二人の奴隷を殺害し、そのうちひとり手斧で脳みそを叩きつぶして虐殺した。彼はかつてこのおぞましく残忍な行為を実行したことを自慢していた。わたしは彼が笑いながらそう自慢するのを聞いたことがあり、その際に特に彼が言っていたのは、仲間内で自分だけがお国に奉仕しており、「ほかの奴らもおれと同じようにすれば、く……い黒んぼから放免されるだろうに」ということである<sup>10</sup>。

人間の生命——ここでの生命とは奴隷の生命のことであるが——に対する無頓着な軽視の証拠として、よく知られている事実を述べても構わないだろう。ロイド大佐の屋敷のほど近くに住んでいたジャイルズ氏の妻が、自らの手で、我が妻のいとこである、十五か十六歳の若い娘を殺害した——彼女の体をひどくぞつとするやり方ですたずたにしたのである。この残忍きわまる女

10 トマス・H・W・ラムデイン (Lambdin) (一八〇七年頃(没年不明)のこと。第一自伝の出版後、ラムデインの友人のひとりダグラスの批判的な描き方に反論する記事を書いており、そのなかでラムデインは「自分以外のだれも傷つけられないくらい善良で無害」だと形容されている。

は、怒りに駆られた挙句、犠牲者を殺害するだけでは満足せず、彼女の顔を文字どおりめちやくちやにして、その胸骨を折つたのだ。とはいえ、この女はひどく怒り狂っていたにもかかわらず、奴隷少女を埋めさせるという用心は怠らなかつた。だが、この事件にまつわる事実は知られることとなり、すぐさま殺害された奴隷少女の亡骸が掘り起こされた。検死陪審が招集され、娘はひどく殴打されたため死に至つたという結論が下された。この娘がこの世からかくも速やかに葬り去られた所以である罪とはこうであることが確認された。彼女は当日の晩とその前の数晩にわたつて、ヒックス夫人の赤ん坊の世話をしよう仰せつかつていたが、ぐつすり寝込んでしまった。赤ん坊が泣き出してヒックス夫人は起きたが、奴隷少女は起きなかつた。娘に何度か呼びかけてもなかなかやつてこないことにかんかんになつたヒックス夫人は、ベッドから跳び起きて暖炉から一本の薪を手に取り、ぐつすり眠つていた娘の頭蓋と胸骨めがけて殴打をくらわせ、その命を終わらせたのだ。このひどくおぞましい殺人がこの地で大騒ぎを起こさなかつたとは言つてもいい。それが大騒ぎを引き起こしたのは確かなのだが、信じられないことに、この地の道徳感覚は奴隷制の恐怖が日常的であるがためにあまりに完全に鈍らされておき、殺人犯が罰を受けることはなかつたのだ。逮捕状は発行されたのだが、なんらかの理由でそれが送達されることはなかつた。こうしてヒックス夫人は相応の罰を逃れただけでなく、司法裁判で認否を問われるという苦痛と屈辱さえ逃れたのである。

ロイド大佐の農園に滞在していたときに起きた残忍な行いについて詳しく述べているが、陰鬱な出来事をもうひとつ手短かに述べ

よう。それはゴア氏によるデンビーの殺害と同時期に起こつた。ワイ河をはさんでロイド大佐の農園の向かい側に、裕福な奴隷所有者であるビール・ボンドリイ氏という人物が住んでいた<sup>11</sup>。彼の土地の方角、河辺近くに、素晴らしい牡蠣の漁場があり、ロイド大佐の奴隷の幾人かが、そこで簡単に獲れる牡蠣で、乏しい食糧配給の不足を補おうと、ときどき夜に小舟に乗つてそこに浮かせていた。これをボンドリイ氏は不法侵入だと考えるようになり、ロイド大佐の所有するある老人がこの河の底に並ぶ大量の牡蠣の数を獲ろうとしていたときに、待ち伏せしていた悪辣なボンドリイ氏はなんら躊躇することなく、彼のマスケット銃の中身をこの哀れな老人の背中と肩に向けて放つた。幸運なことに弾は急所を外れ、ボンドリイ氏は翌日、ロイド大佐に会いにやつてきた——大佐の財産の損失分を支払うためなのか、それとも自分がやつたことを弁明するためなのかはわからない。ただ、わたしが言えるのは、この残忍で卑劣な行いはすぐさまもみ消されたということである。これについてなにかが口にされることはほとんどなく、偶然、だけで真の殺人犯になることを逃れたこの人物に対して、正義の原則の適用らしきものが公になされることはなかつた。ロイド大佐の農園やメリーランドのほかの場所であつたの耳が早いうちから聞き慣れてきたごくありふれた言い習わしのひと

11 ジョン・ビール・ボンドリイ（一八〇〇〜八二）は、独立戦争期のメリーランドの同名の著名な農園主（二七二七〜一八〇四）の孫にあたる人物。ワイ河をはさんでロイド大佐の農園の向かいにあるワイ島で生まれ育ち、二十代半ばにフィラデルフィアで法律を学んだのち、ボルチモアなどで著名人の肖像画を専門とする画家として成功した。

つに、「黒んぼを殺しても半セント、そいつを埋めても半セントしかかからない」というのがあるが、わたしが経験した諸事実は、この奇妙な格言が実際に真実だと立証することに寄与している。奴隷の生命を守るための法律は、それによって名目上守られている当事者が、唯一そこから虐待、暴行、殺人を受けることが合理的に懸念される種類の人々に対して、法廷において証言をすることが許されていないところでは、必然的に、執行するのが完全に不可能である。メリーランド東岸の奴隷所有者たちによってなされた数多くの殺人のことを耳にしていた一方で、奴隷所有者が奴隷を殺したことで絞首刑に処せられたり、投獄されたという事例はひとつたりとも知らない。よくある奴隷を殺す口実は、奴隷が抵抗したというものである。奴隷が襲撃されたときに、自己防衛のために片手でも上げてしまうと、襲撃した白人の当事者がその奴隷を撃ち殺しても、南部もしくはメリーランドの世論によって完全に正当だと認められる。ときに、単にその奴隷が生気だったという主張だけで、そのように認められるのである。だがこのへんで、わたしの幼年時代の社会のこうした側面については終わりにして、これらの悲痛な詳細から心やさしき読者を解放しよう。